

和泉式部集

「春」

一 はるがすみたつやおそきと山がはの、岩間をくくるおと聞こゆなり

二 春日野は雪のみつむと見しかども、おひいつるものは若菜なりけり

三 秋までのいのちもしらず春の野に、萩のふるねを焼くと焼くかな

四 春はただわが宿にのみ梅咲かば、かれにし人も見にと來なまし

五 風だにも咲きはらははずはにはびくくら、散るとも春のほどは見てまじ

六 花の時、心しづかならず、といふことを

のどかなる時こそなけれ花をおもふ、こころのうちに風は吹かねど

「夏」

七 夏の夜はともしの鹿の目をだにも、あはせぬほどに明けぞしにける

八 ながめには袖さへぬれぬさみだれに、おりたつ田子のもすそならねど

九 四月一日

さくら色にそめしたもとをぬぎかへて、山ほどとぎす今日よりぞ待つ

「秋」

十 憂しとおもふわが身もあきにあらねども、よろづにつけてものぞかなしき

十一 人もがな見せも聞かせも萩の花、咲くゆふかげのひぐらしのこゑ

十二 たのめたる人はなけれど秋の夜は、月見で寝べきこちこそせね

十三

秋くればときは山の松風も、うつるばかりに身にぞしみける

十四

秋吹くはいかなる色の風なれば、身にしむばかり人のこひしき

十五 菊を

君が經む千代のはじめのなが月の、今日ここぬかの菊をこそつめ

十六 あさがほ

ありとしもたのむべきかは世の中を、しらするものはあさがほの花

十七 蟲

なく蟲のひとつこゑにも聞こえぬは、こころこころにものやかなしき

十八 霧を

はれずのみものぞかなしき秋霧は、こころのうちにたつにやあるらん

十九 秋の暮

あきはてていまはとかなし浅茅原、人のこころに似たるものかな

とやま吹く嵐のかぜの音聞けば、まだきに冬の奥ぞ知らるる

二十一

見わたせば、眞木のすみやくけをぬるみ、おほはら山の雪のむらぎえ

二十二

さびしさにけぶりをだにもたてんとて、柴折りくぶる冬の山里

二十三

かぞふれば年ののこりもなかりけり、老いぬるばかりかなしきはなし

二十四 つれづれのながめ

つれづれとながめくらせば冬の日も、春のいく日におとらざりけり

二十五 庭の雪

待つ人のいまも來たらばいかげむ、踏ままく惜しき庭の雪かな

「恋」

二十六

さもあらばあれくもるながらも山の端に、いでいる夜はの月とだに見は

二十七

二十

「冬」

黒髪のみだれもしらずうちふせば、まづかきやりし人ぞこひしき

三十五

二十八

おしなべて花はさくらになしはてゝ、散るてふことのなからましかば

なみだがはおなし身よりはながるれど、こひをば消たぬものにぞありける

三十六

二十九

みな人をおなし心になしはてゝ、おもふおもはぬなからましかば

たらちねのいさめしものをつくづくと、ながむるをだに知る人もなし

三十七

人にさだめさせまほしきこと

三十 親の心よからずおもひけるころ、いはほのなかにもといふうたを、旬のかみごとにすゑて、うたをよみて、母のがりつかはしける

いづれをか世になかれとはおもふらん、忘るゝ人と忘らるゝ身と

いにしへやものおもふ人をもどきけん、むくいばかりのこちこそすれ

三十八

なき人となして戀ひんとありながら、逢ひ見ざらんといつれまされり

三十一

春雨のふるにつけてぞ世の中の、憂きはあはれとおもひしらるる

三十九

あやしきこと

三十二

惜しとおもふ折やありけんありふれば、いとかくばかり憂かりける身を

四十

世の中にあやしきことはいとぶ身の、あらじとおもふに惜しきなりけり

三十三

いかばかりふかきつみとかなりぬらん、塵の水だに山とつもれば

四十一

たのめたる男の、いまやいまやと待ちたるに、まへなる竹の葉に、あられのふりかかるとを聞きて

三十四 つれづれなりし折に、よしなごころにおぼえしごと、世の中にあらまほ

四十二

かたらひたる男のもとより、忘るなどのみ言ひおこすれば

つれごと

夕暮れはさながら夢になしはてゝ、聞てふことのなからましかば

いさやまたかはるも知らずいまこそは、人のこころを見てもならはめ

四十三 たのめて來ぬ人に、つとめて

やすらひに眞木の戸をこそささざらめ、いかにあけつる冬の夜ならん

四十四 雨のいたく降るに、なみだの雨の袖に、など言ひたる人に

みし人に忘られてふる袖にこそ、身を知る雨はいつもをやまね

四十五 世のさわがしきころ

ものをのみおもひしほどにはかなくて、淺茅が末に世はなりにけり

四十六

しのぶべきなき身にはある折に、あはれあはれと言ひやおかまし

四十七 ひさしくとはぬ人の、からうじておとづれて、またおとせぬに

なかなかにうかりしままにやみにせば、忘るるほどになりもしなまし

四十八 ときどきくる人の、暮れゆくほどに、と言ひたるに

ながめつゝことありがほにくらしても、かならず夢の見えはこそあらめ

四十九 世の中いたくさわがしきころ、とはぬ人に

世の中はいかになりゆくものとてか、こころのどこかにおとづれませぬ

五十 ものへゆく人に

あるほどは憂きをみつつもなぐさめつ、かけはなれなばいかにしのばむ

五十一 山寺にこもりたるに、人の葬送したるを見て

たちのぼるけぶりにつけておもふかな、いつまたわれを人のかく見む

五十二 おもふ人、ふたりながら、遠きところにあるを、待つとて

これにつけかれによそへて待つほどは、たれをたれともわかれざりけり

五十三 なげく事しげきころ

さまざまにおもふころはあるものを、おしひたすらにぬるる袖かな

五十四 ものへいにし人、ひさしくおとせぬを、ものなどはするに、このほどと言ひけるも、すぎければ

忘れなんものぞとおもひしそのかみの、こころのうらぎまさしかりける

五十五 しのびたる男の、いたくなる衣を、かしがましとおしのければ

おとせぬはくるしきものを身にちかく、なるとていとふ人もありけり

五十六 つらきをも見知らで、たのむと言ひたる人に

こころをばならはぬものぞあるよりも、いざつらからんおもひ知るやと

五十七 わりなくうらむる人に

津の國のこやとも人をいふべきに、ひまこそなけれ蘆の八重ぶき

五十八 ものをおもひつづくるに、いたうかなしければ

なにごとともころにこめてしのぶるを、いかでなみだのまづ知りぬらん

五十九 雁の子を、人のおこせたるに

いくつづついくつかさねてたのままし、かりのこの世の人のころは

六十 人の、夜ふけて來たりけるを、聞きつけて、寝たるがすることなど言ひたるに

ふしにけりさしもおもはでふえたけの、音をぞせましよふけたりとも

六十一 ひさしうおとづれぬ人の、便なかるまじうはまぬらん、と申したれば

もしも來は道のまぞなき宿はみな、淺茅が原となりはてにけり

六十二 こころあしきころ、人に

あらざらむこの世のほかのおもひいでに、いまひとたびの逢ふこともがな

六十三 ものへ行くとて、人に

いつかたへ行くとはかりはつけてまし、とふべき人のある身とおもはば

六十四 八月ばかり人のもとに、萩につけて

かぎりあらんかははかなくなりぬとも、露けき萩のうへをだにとへ

六十五 心憂しとおもふ人の、おほかたに來たるに

憂きを知るころなりせば世の中に、ありけるとだに見でやみなまし

六十六 播磨のひじりにやる

くらきよりくらき道にぞいりぬへき、はるかに照らせ山の端の月

六十七 尼になりなんなど言ふを、なほいましばしおもひのどめよ、と言ふ人に

かくばかり憂きをしのびてながらへば、これよりまさるものをこそおもへ

六十八 法師のたふとぎがまうできて、扇をおとしたるにつかはすとて

はかなくも忘れにけるあふぎかな、おちたりけりと人もこそみれ

六十九 わりなきことにてうらむる人に

憂しとみておもひすてにし身にしあれば、わがころにもまかせやはする

七十 つねにたえまがちなる人に

このたびをかぎりとみるにおつれども、つきせぬものはなみだなりけり

七十一 あとに寝ばや、と申したる人に

寝られねばとこなかにかのみおきみつ、あともまくらもさだめやはする

七十二 かたらふ人の、なくなりなん世まで忘れじ、と言ふが、心地わづらふと聞くを、ひさしくとはぬに

しのばれんものとはみえぬわが身かな、あるほどをだにたれかとひける

七十三 しのびたる人の、とのものに、むらさきの直垂をとりやるとて

色にいで人にかたるなむらさきの、ねずりのころもきて寝たりきと

七十四 二月ばかり、女の返り事せぬに、男にかはりて

あとをだに草のはつかに見てしがな、むすぶばかりのほどならずとも

七十五 めなかへ行く人の、扇などおこせて、かみの社かきたるところに、いのりつるしるしも、とあるところに

いのりけるころのほどをみてぐらの、さしてはいまそおもひ知りぬる

七十六 男に忘れられてなげきけるころ、霜の降れる朝に、人のもとに

けさはしもおもはむ人はとひてまし、つまなきねやのうへはいかにと

七十七 雨のおどるおどろしく降るつとめて、今宵はいかに、と宮よりある御返り事

よもすがらなにことをかはおもひつる、窓つつ雨の音を聞きつゝ

七十八 石山にこもりたるに、ひさしくおとづね給はで、師宮より

關こえて今日ぞとふとや人は知る、おもひたえせぬころづかひを

七十九 返し

あぶみぢは忘れにけりとみしものを、關路うちこえとふ人やたれ

八十 人のこひしと

けさのまにいまはひぬらん夢ばかり、ぬるとみえつるたまぐらの露

八十一 小式部内侍、露おきたる萩おりたる唐衣を着て侍りけるを、みまかりて

後、上東門院よりたづねさせ給ひけるに、たてまつるとて

おくとし露もありけりはかなくて、きえにし人をなにととへん

八十二 御かへし

おもひきやはかなくおきし袖のうへの、露をかたみにかけんものとは

八十三 ものおもひ侍りけるころ

ねざめする身を吹きとほす風の音、むかしは袖のよそに聞きけん

八十四 小式部内侍みまかりて後、つねにもち侍りし手箱を、誦經の布施にす、とて

こひわぶと聞きにだに聞け鐘の音に、うち忘らるる時のまぞなき

八十五 やよひのころ、よもすがら物語りして歸り侍りし人の、けさはいとどもおもはしきよし、申しつかはしたりしに

けさはしもなげきもすらいたづらに、春の夜ひと夜夢をだに見で

八十六 たのめて侍りける女の、後には返事をだにせず侍りければ、この男にかはりて

いまこんといふことのはもかれゆくに、よなよな露のなにおくらん

八十七 ものおもひ侍りし折

いかにしていかにこの世にあり経ばか、しばしものをおもはざるべき

八十八 敦道のみこのもとに、前大納言公任の白河院にまかりてまたの日、つか

はしける使ひにつけて

折る人のそれなるからにあぢきなく、見しわが宿の花の香ぞする

八十九 月あかく侍りし夜、人のほたるをつつみてつかはしたりしに、雨降りしにつかはしたりし

おもひあらばこよひの空はとひてまし、見えしや月のひかりなりけん

九十 つれづれなりしころ、ひとりながめて

すみなれし人がげもせぬわが宿に、有明の月のいく夜ともなく

九十一 少将井の尼、大原よりいでたと聞きて、つかはしける

世をそむくかたはいづくにありぬべし、大原山はすみうかりけり

九十二 身のはかなくおぼえしころ

いのちさへあらば見つべき身のはてを、しのばん人のなきぞかなしき

九十三

潮のまに四方のうらうらたづぬれば、いまはわが身のいふかひもなし

九十四 道貞に忘れられて後、ほどなく敦道親王かよふと聞きてつかはしける

うつろはでしはししのだの杜を見よ、かへりもぞする葛のうら風

九十五 返し

あき風はすこく吹くとも葛の葉の、うらみがほには見えじとぞおもふ

九十六 和泉の國に下りて侍りしに、都鳥のほのかに鳴き侍りしかば

こととはむありのまにまにみやこどり、みやこのことをわれに聞かせよ

九十七 小式部内侍みまかりて、むまごどもの侍るを見て

とどめおきてたれをあはれとおもふらん、子はまさりけり子はまさらん

九十八 敦道親王におくれて

いまはただそのよのこととおもひいでて、忘るばかりのうきふしもがな

九十九 おなしころ、尼にならんとおもひて

すてはてんとおもふさへこそかなしけれ、きみになれにし我ぞとおもへば

百 しはすのつごもりの夜

なき人のくる夜と聞けどきみもなし、わがすむ宿やたまなきの里

百一 男の、はじめて人のもとにつかはし侍りしに、かはりて

おほめくなたれとはなくてよよひに、夢に見えけるわれぞその人

百二 戀のうたとて

下消ゆる雪間の草のめづらしく、わがおもふ人にあひ見つるかな

百三 人の、たのめて來ず侍りければ、つとめてつかはす

おきながら明かしつるかなとも寝せぬ、鴨の上毛のしもならなくに

百四 夜ごとに、來んとて夜離れし侍りける男に

今宵さへあらはかくこそおぼほえめ、けふ暮れぬまのいのちともがな

百五 男に忘られて、装束などつつみておくり侍りしに、かはの帯にむすびつけ
て

泣きながすなみだにたへでたえぬれば、はなだの帯のこちこそすれ

百六 つゆばかりあひそめたる人のもとに

白露も夢もこの世もまぼろしも、たとへていへばひさしかりけり

百七 戀のうた

たぐひなき憂き身なりけりおもひしる、人だにあらばとひこそはせめ

百八

世の中にこひてふ色はなけれども、深く身にしむものにぞありける

百九

人の身もこひにはかへつ夏蟲の、あらはに燃ゆと見えぬばかりぞ

百十

夕暮れにものおもふことはまざるやと、われならざらん人にとはばや

百十一

いかにして夜のこころをなぐさめん、晝はながめにさてもくらしつ

百十二

これもみなさぞなむかしの契りぞと、おもふものからあさましきかな

百十三

ほどふれば人は忘れてやみぬらん、契りしことをなほたのむかな

百十四

ともかくもいはばなべてになりぬべし、音に泣きてこそ見すべかりけれ

百十五

ひとりのみあはれなるかとわれならぬ、人に今宵の月を見せばや

百十六

五月五日、人のもとより

ひたすらに軒のあやめのつくづくと、おもへばねのみかかる袖かな

百十七

宵のほどまうできたりける男の疾く歸りにければ

やすらはでたつにたちつき眞木の戸を、さしもおもはぬ人もありけり

百十八

小式部内侍のもとに二條前内大臣はじめてまかりぬと聞きて、つかはし

ける 堀河右大臣

人知らでねたさもねたしむらさきの、ねずりのころもうはぎにをせん

百十九

返し

ぬれぎぬと人にはいはんむらさきの、ねずりのころもうはぎなりとも

百二十六 御返し

百二十 男、隔つることなくあだならん、など契りて、いかがおぼえけん、人まにかくれあそびもしつ、など言ひ侍りしかば

奥山にたぎりて落つる滝つ瀬の、たまちるばかりものなおもひそ
百二十七 道貞に忘れられて後、みちの國の守にて下り侍りしにつかはしたりし

いづくにか來てもかくれんへだてたる、こころのくまのあらばこそあらめ

もろともたたましものをみちのくの、衣の關をよそに聞くかな

百二十一 門おそくあくとて歸りける人のもとに

百二十八 保昌に具して丹後の國へまかりしに、しのびてもの申す男のもとに

ながしとてあけずやらん秋の夜は、待てかし眞木のとばかりをだに

われのみやおもひおせんあぢきなく、人はゆくへも知らぬものゆゑ

百二十二 丹後の國にて、保昌、明日狩せん、と言ひける夜、鹿のなくを聞き

朝に
百二十九 月のあかく侍りしに、まうで來たりし男の、立ちながら歸りしかば、

ことわりやいかでか鹿のなかざらん、今宵ばかりのいのちとおもひて

なみださへいでにしかたをながめつつ、こころにもあらぬ月を見しかな

百二十三 かたらひたる男の、女のもとにつかはさんとてうたえひ侍りければ、まづ、わがことをよみ侍りし

百三十 同じ所なる男の、かきたえにしかば

かたらへばなくさむことはあるものを、忘れやしなごひのまぎれに

いくかへりつらしと人をみくまの、うらめしながらごひしかるらん

百二十四 石山に参り侍りける道に、山科といふところにてやすみ侍りけるに、家あるじの、心あるさまに見え侍りければ、いま歸りなまにも、など言ひ侍りしを、よにさしも、と言ひ侍りければ

百三十一 たがひにつつむことある男の、たやすくあはず、とうらみしかば
おのが身のおがこころにかなはぬを、おもはばものをおもひ知りなん

かへるを待ちこころみよかくながら、よまただにてはやましなの里

百三十二 しのびたる男の、いかがおもひけん、五月五日の朝に、明けての後
歸りて、今日あらはれぬるなんうれしき、と言ひたる返り事に

百二十五 男に忘れられて侍りけるころ、貴船に参りて、みたらし川の、ほたるのとび侍りしを見て

あやめぐさかりにも來らんものゆゑに、ねやのつまとや人の見るらん

ものおもへば澤のほたるもわが身より、あくがれいつるたまかどぞ見る

百三十三 保昌に忘れられて侍りしころ、かねぶさの朝臣とひて侍りしかば

人知れずものおもふことはならひにぎ、花にわかれぬ春しなければ

百四十一　なにのみことかやにおくれて

百三十四　もの言ひわたりける男の、八月ばかりに、袖の露けき、など言ひて
侍りける返り事に

惜しきかな形見に着たるふだころも、ただこのころにくちはてぬべし

あきはみなおもふことなきをぎの葉も、すゑたわむまで露はおくめり

百四十二　大宰師敦道のみこ、仲たえけるころ、秋つかた、おもひいでて、も
のして侍りしに

百三十五　男をうらみて

待つとてもかばかりこそはあらましか、おもひもかけぬあきの夕暮れ

あしかれとおもはぬ山の峯にだに、生ふるものを人のなげきは

百四十三　かきたえておとせぬ人に

百三十六　入相の鐘を聞きて

うらむべきころばかりはあるものを、なきになしてもとはぬ君かな

夕暮れはものぞかなしき鐘の音、あすも聞くべき身とも知らねば

百四十四　彈正尹爲尊のみこかくれ侍りて後に、大宰師敦道のみこ、花たちはな
をつかはして、いかが見る、と言ひて侍りしかば、言ひつかはし侍りし

百三十七　人ものがたりして侍りしほどに、また人の來たりしかば、誰も歸り
にし朝に、言ひつかはしし

かをる香によそふるよりはほととぎす、聞かばやおなし聲やしたると

中空にひとりありあけの月を見て、のこるくまなく身をぞ知りぬる

百四十五　なげくこと侍りけるに

百三十八

花咲かぬ谷の底にもあらなくに、深くもものをおもふ春かな

つれづれとふるはなみだの雨なるを、春のものとや人の見るらん

百三十九　海の面に船ながら明かして

百四十六　石山に参りて侍りけるに、大津にとまりて、夜更けて聞きければ、人の
けはひあまたしてのしりけるを、たづねければ、あやしの賤の女が、米といふもの
しらげ侍り、と申すを聞きて

水の上につきねをしてぞおもひ知る、かかれば鷺鷥もなくにぞありける

鷺のゐる松原いかにさわぐらん、しらげばうたてさととよみけり

百四十　離れにたる男の、遠き所へ行くを、いかがおもふ、と言ひしに

百四十七　小式部内侍うせて後、上東門院としころたまはりける衣を、なきあと
にもつかはしたりけるに、小式部内侍とかきつけられたりけるを見て

わかれてもおおなし都にありしかば、いとこのたびのここちやはせし

もるともに苔の下には朽ちずして、つづもれぬ名を見るぞかなしき

百四十八 地獄繪に、つるぎの枝に人のつらぬかれたるを見て

あさましやつるぎの枝のたわむまで、こはなにのみのなるにあるらん

百四十九 賀茂に参りたりしに、わらつづに足をくはれて、紙を巻きたりしを、
なにちかやらん

ちはやぶるかみをば足にまくものが、

と申したりしを

これをぞしものやしるとはいふ

百五十 また同じやしるにて

ちはやぶるかみの齋垣もこえぬべし

と申したりしを

みてぐらどもにいかでなるらん